

## Ⅱ 遺 構

### 1 遺跡の概観

調査地の北には、北新大池があり調査地との間には池の築堤が東西に存在する。調査地の南には通称大宮通りが、東には市道が通る。いずれも調査地より 1 m ほど高く、築堤状をなす。調査地の西だけに現在も畑と水田が残り、調査地も工場用地となる前は水田で、水田面は東へ向かうに従い、徐々に低くなる、平城宮第一次朝堂院地区の乗る尾根の末端が調査地西側にまで延びてきているためである。調査地の市道をはさんだ東側一帯も現在は水田であるが、近隣の開発にともない駐車場用地としての開発が盛んである。

調査地の層序は、一部に残る盛土の下に水田時代の旧耕土・床土があり、その下に遺物包含層である黄褐粘土層がある。黄褐粘土を除去すると、暗褐色粘質土の地山上で奈良時代の遺構が検出された。今回の調査では、一部に古墳時代の土壌と思われる遺構を検出したが、攪乱のため全容は明らかでない。調査地北半部には東西方向の耕作溝が検出されたが時期は明らかでない。遺物は前後の時代を含む。黄褐粘土層は、弥生式土器片から中世の竜泉窯系青磁碗の破片までの広範囲の遺物を含む。調査地中央東よりの SK5772 周辺に堆積する黄褐粘土層下の暗灰褐砂質土中からは、6 世紀代の須恵器がまとめて出土した。



fig.4 周辺の開発状況

## 2 遺 構

今回の調査では、13棟の掘立柱建物のほか、6基の土壇（大量に土器を捨てた穴）、5基の井戸、道路2条、掘立柱塀1条や素掘りの溝などが発見された。以下、各遺構ごとに解説する。遺構は一連の番号を付し、遺構の種別を表すために、SA 塀、SB 建物、SD 溝、SE 井戸、SF 道路、SK 土壇の記号を遺構番号の前に付し表記する。

### A 掘立柱建物

**SB5751** 発掘区の北西隅に位置する梁間2間（4.2m）×桁行2間（3.2m）以上の南北棟で、柱間寸法は桁行方向で1.6m（5.5尺）等間、梁行方向で2.1m（7尺）等間である。桁行柱穴（掘形）は1辺が40～50cmと小さい。

**SB5752** 発掘区の北西隅ちかくに位置する南庇つきの南北棟。平面は桁行3間（5.5m）×梁間4間（5.6m）で、身舎の梁間を3間と長くところが特徴的である。柱間寸法は、桁行方向が1.8m（6尺）等間、梁行方向が1.4m（4.5尺）等間で、庇の出も1.4mである。柱穴は、身舎・庇ともに1辺が40～80cmで、東妻と南側柱筋で4本の柱根が残っており、最大のもので直径18cm（6寸）ある（fig.6）。

**SB5753** 発掘区の北半中央から東壁にのびる長大な南庇つきの東西棟。近代の攪乱により、多くの柱穴が失なわれているが、平面は梁間3間（4.2m）×桁行5間（13.0m）以上と推定される。柱間寸法は、身舎が桁行方向で2.6m、梁行方向で2.7mと、いずれも9尺等間に復原できるが、庇の出はこれより長く、3.0m（10尺）となっている。柱穴は他の建築遺構よりも大きく、身舎で1辺90～110cm、庇で1辺60～80cmである。

**SB5754** 発掘区の北半西よりに位置する東庇つきの南北棟で、桁行5間（9.9m）×梁間3間（6.3m）の平面を明確に検出した。柱間寸法は、身舎が桁行方向で2.0m（7尺）等間、梁行方向で1.9m（6.5尺）等間であるが、庇の出は2.5m（8.5尺）で、SB5753と同じく、身舎柱間よりも長くとしている。柱穴はSB5753よりもわずかに小さめで、身舎が1辺90～100cm、庇が60～90cmである。



fig.5 SB5752・5754



fig.6 SB5752 柱穴断面

**SB5755** 発掘区の北半西よりに位置する、桁行5間(9.5m)×梁間2間(3.8m)の東西棟。柱間寸法は、桁行・梁行方向ともに1.9m(6.5尺)である。柱穴は1辺50～80cmで、13棟のなかでは中規模に属する。

**SB5756** 発掘区の中央西よりに位置する2間(5.6m)×1間(2.1m)以上の建築遺構だが、北半部分が攪乱のため検出できず、全体平面は確定していない。しかし、遺構の北側に柱筋のそろう柱穴が存在しないので、2間×2間の小規模な東西棟に復原できよう。柱間寸法は桁行方向で2.6m(9尺)等間、梁行方向で2.1m(7尺)である。柱穴は、一辺50～70cm。

**SB5757** 発掘区のほぼ中央に位置する南庇つきの東西棟。井戸SE5767を埋めた上に、この建物を建てている。桁行3間(4.8m)×梁間3間(5.9m)で、身舎の柱間寸法は桁行方向で1.6m(5.5尺)等間、梁行方向で1.9m(6.5尺)等間である。庇の出は2.1m(7尺)で、やはり梁行柱間より長くとしている。柱穴は身舎が1辺60～80cm、庇が50～70cmで、南側柱筋の西から2列めに柱根がのこっているが、腐朽がいちじるしい。

**SB5758** 発掘区東壁が鋭角状に突起する部分に位置する南庇つきの東西棟。桁行2間(5.9m)以上×梁間3間(9.5m)で、身舎の柱間寸法は桁行・梁行方向ともに3.0m(10尺)等間だが、庇の出は3.5m(12尺)と身舎柱間より長くとる。柱穴は、身舎が90～120cm、庇が60～80cmと13棟のなかでは最も規模が大きい。遺構の中央～東半部分は市道の下で今後しばらくは発掘不可能と思われるが、柱穴規模および梁間寸法との関係などからみて、桁行5間以上の大規模建物である可能性が大きい。

**SB5759** 発掘区の中央西よりで、SB5756のわずかに南に位置する東西棟。攪乱のため、南側柱筋の柱穴の大半が失なわれているが、北側柱および東西両妻の柱穴

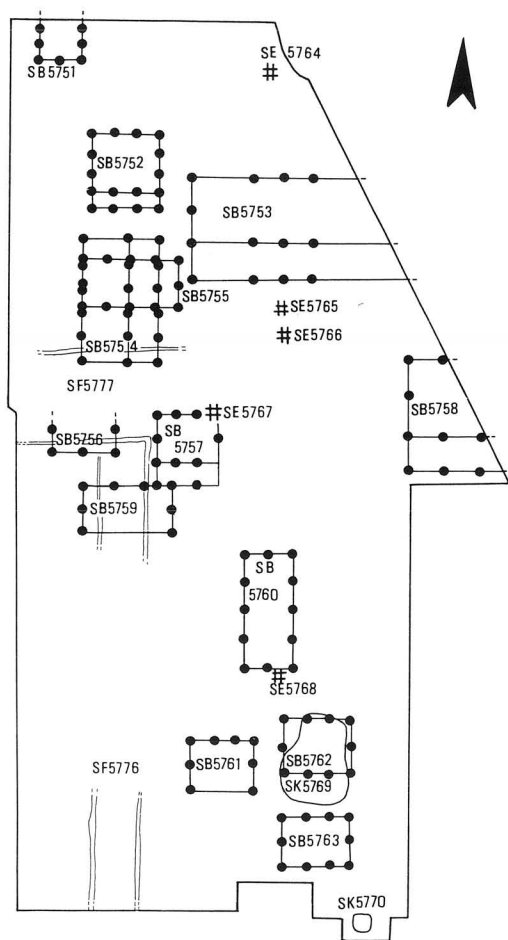


fig.7 遺構配置図

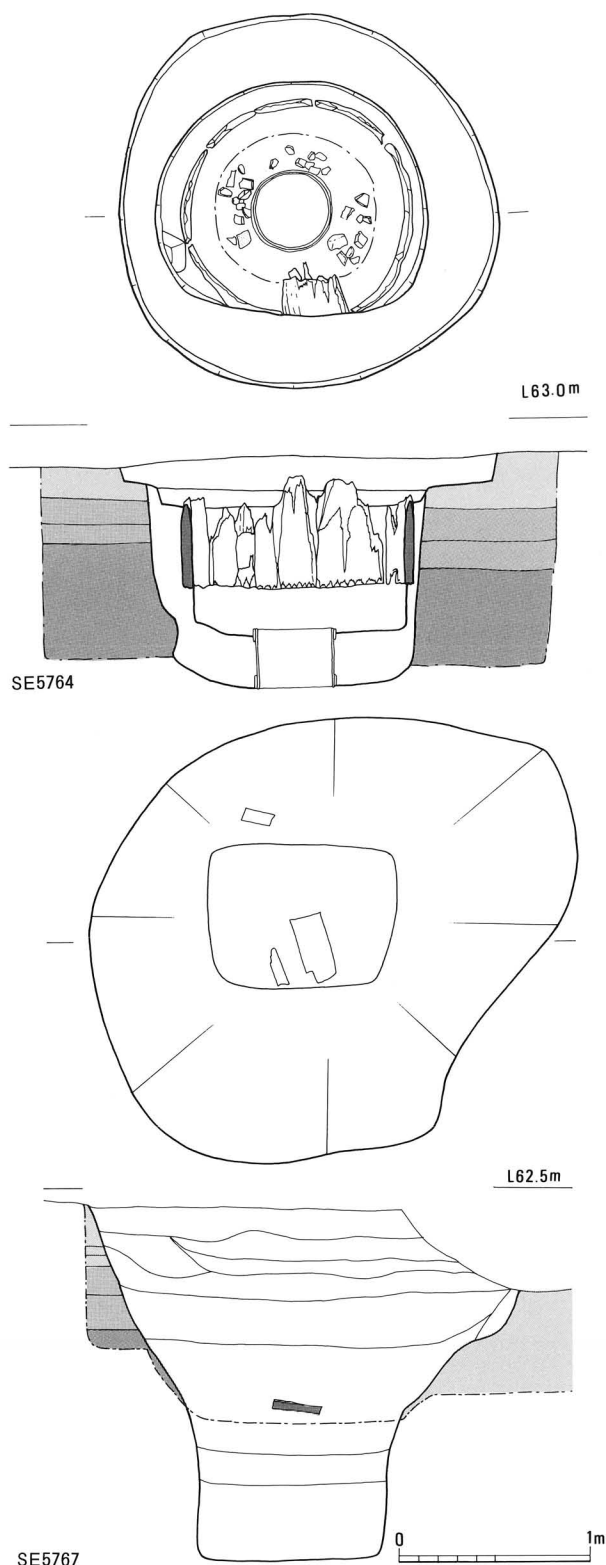


fig.8 SE5764・SE5767

はいずれも明確で、3間（6.5m）×2間（3.5m）に復原できる。柱間寸法は桁行方向で2.2m（7尺）等間、梁行方向で1.8m（6尺）等間である。柱穴は1辺が50～90cmで、東妻の中央柱穴に柱根（直径9cm）が残る。

**SB5760** 発掘区の中央南よりに位置する南北棟。桁行4間（9.4m）×梁間2間（4.0m）で、柱間寸法は桁行方向で2.4m（8尺）等間、梁行方向で2.0m（7尺）等間である。柱穴は1辺が50～90cmとばらつきがある。

**SB5761** 発掘区の南半中央に位置する東西棟。攪乱によって南北側柱のうち3本分の柱穴が検出できなかったが、桁行3間（6.0m）×梁間2間（3.8m）に復原できる。柱間寸法は、桁行方向で2.0m（7尺）等間、梁行方向で1.9m（6.5尺）等間である。柱穴は1辺が50～80cmで、中規模にあたる。

**SB5762** 発掘区南半中央東よりに位置する東西棟。大土壌SK5769が埋められたあとに建てられた、桁行3間（6.0m）×梁間2間（4.8m）の掘立柱建物である。柱間寸法は、桁行方向で2.0m（7尺）等間、梁行方向で2.4m（8尺）等間である。柱穴は一辺が40～80cmで、西妻柱と東南隅柱に柱根（直径11cm・14cm）が残る。

**SB5763** 発掘区東半中央南壁よりに位置する東西棟。桁行3間

(5.5m)×梁間2間(4.0m)で、柱間寸法は桁行方向で1.8m(6尺)等間、梁行方向で2.0m(7尺)等間である。柱穴は60~90cmと、平面規模のわりには大きめといえる。西南隅柱の柱根(直径7cm)が残る。

#### B 井戸 (fig. 8-10)

**SE5764** 発掘区北東隅に位置する円形縦板組井戸。掘形・井戸枠ともに円形で、掘形の直径約2m、井戸枠の直径約1.2mである。井戸枠は、湾曲加工した縦板を6枚をつなぎあわせて円筒形をつくる独特の構造で、底の中央には曲物をすえる。曲物の周囲には小石と瓦の小片を敷く。

**SE5765・5766** 隣接する2基の井戸で、掘形の重複関係からみると、南側のSE5766が古く、北側のSE5765が新しい。

SE5766は方形縦板組の井戸枠(90×90cm)を残し、掘形も方形である。3段の横棧の

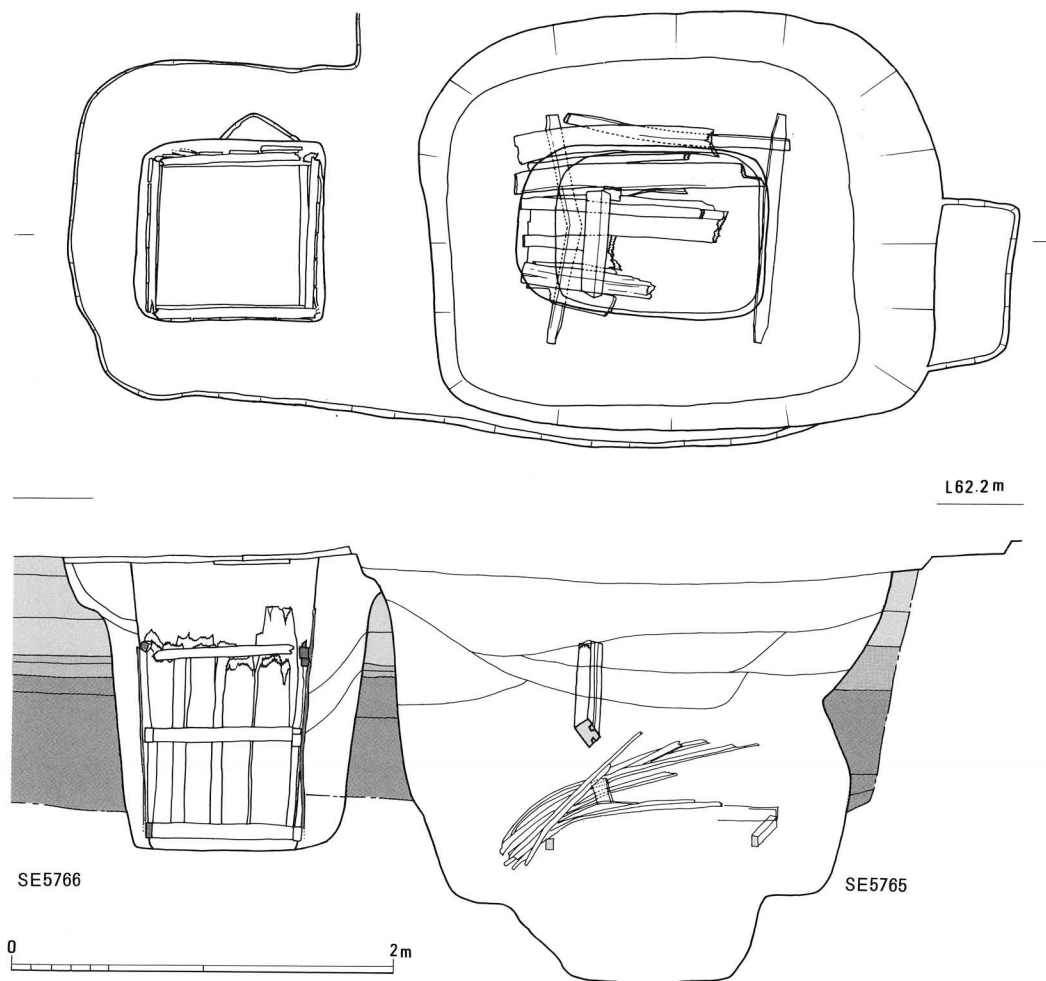


fig.9 SE5765・5766

外側に、各面 6～8 枚の縦板をおく。

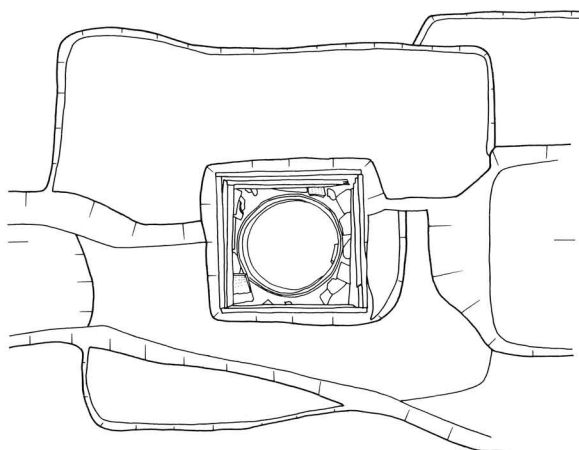
SE5765は直径約2.5mの大きな楕円形の掘形の中央に、方形縦板組井戸枠をおく。井戸枠はほとんど抜き取られているが、おそらく抜き取り時に掘形が崩落したためだろう、最下段の横棧4本と、南側の縦板、縦棧の一部が残されていた。横棧は長さ約1.2m。縦板は計11枚が残り、北側に大きく湾曲しながら倒れ込んでいた。縦棧の一部には、井戸と関係のない仕口と、鉄釘が残されており、転用材である。

SE5767 発掘区のほぼ中央に位置する。一辺約2.2mの隅丸方形の掘形をとまうが、攪乱により東側約半分が失われている。井戸枠はほとんど抜き取られ、かろうじて縦板1枚だけが残存する。

SE5768 発掘区の南半中央東よりに位置する小形の井戸。掘形は1辺が2.0～2.4mの不整長方形を呈し、井戸枠は1辺約70cmの正方形横板組。横板は北面が5段で、他は4段。横板の外側には、各面7～9枚の縦板をおく。横板に続けて曲物を2段にすえる。

## C 土 墳

SK5769 発掘区南半中央東よりに位置する。南北7m、東西6mの大きな不整形土墳



で、深さは50～60cmと浅いが、大形の須恵器甕Aをはじめ大量の土器が出土した。底面に張り付いた状態で出土した土器群には、完形の須恵器が多く含まれる。須恵器甕Aも分散することなく同一個体の破片がまとまって出土している。ただし甕を据え付けた痕跡は認められない (fig11)。

SK5770 発掘区南東隅の拡張区に位置する。東西約2m、南北1.5mの不整形土墳で、平面規模はSK5769よりも小さいが、深さは約1mと深く、大量の土器と銅製帯金具が出土した。

SK5771・5772・5773・5774

いずれも平面不整形で浅い土墳。

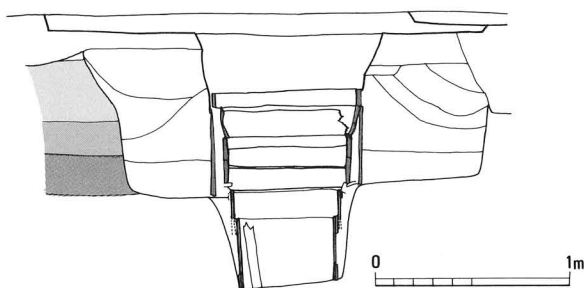


fig.10 SE5768

## D 堀・溝・道路

SA5775 SB5760の東側前方1.8

m（6尺）の位置にならぶ掘立柱の南北塀。総長9.0m、5間の塀で、北端をSB5760の北妻にそえる。柱間寸法は、1.8m（6尺）等間。

**SF5776** 発掘区の南半西よりで、南北方向に通る道路。道路幅は、両側溝間の心々距離で3.6m（12尺）。大きな攪乱によって南北に分断されており、南端は発掘区南壁からさらに南にのび、北端は東西溝SD5780によって区画される。SD5778が東側溝。残存遺構の上面幅49cm、深さ28cmの素掘り溝。SD5779が西側溝。残存遺構の上面幅42cm、深さ15cmの素掘り溝。

**SF5777** 発掘区の中央東よりで、東西方向に通る道路。道路幅は、両側溝間の心々距離で7.2m（24尺）。道路の西端は発掘区からさらに西にのびるが、東側はSD5779とSD5780が交差するあたりで途切れており、東端が明瞭ではない。SD5780が南側溝。いくぶん北にふれた東西溝であり、東端でSD5779と合流する。上面幅30～45cm。SD5781が北側溝。SD5780とほぼ平行で、やはりわずかに北にふれた東西溝である。上面幅20～40cm。

**SD5782** 発掘北半中央をながれる蛇行溝。西端はSB5754の西側柱列からはじまり、SB5754の下層をいくぶん南下してから東へのびてSE5765に分断されつつ、その東までのびる。上面幅30～40cm。

**SD5783** 発掘区北壁から東壁に向かってながれる斜行溝。上面幅30～50cm。

**SD5784** 発掘区東壁から西に約2mのところをながれる南北溝。遺物包含層の上面からすでに遺構を確認できたが、地山面まで掘り下げたため、遺構はあさくなり、一部は失われ分断される。上面幅15～45cm。



fig.11 SK5769土器出土状況（1：60、略号：須＝須恵器、土＝土師器、番号はⅢ遺物の土器番号）